

広汎性発達障害者の対人トラブルに対する支援の一事例

—自然な生活文脈を活用した他者視点取得の機会の創出から—

水内 豊和・成田 泉

広汎性発達障害者の対人トラブルに対する支援の一事例

—自然な生活文脈を活用した他者視点取得の機会の創出から—

水内 豊和・成田 泉*

Practical study of support for person with pervasive developmental disorder (PDD) in a naturally setting events:
In case of interpersonal problems

Toyokazu MIZUUCHI & Izumi NARITA

摘要

広汎性発達障害者のもつ他者心情理解の弱さ等に起因する対人トラブルについて、その事案への事後指導はもちろんであるが、日常生活の中で機会をとらえて指導していくことも必要である。本論では、異性へのつきまとい行為で職場から相談のあった広汎性発達障害成人Aに対し、自然な生活文脈の中で他者視点取得の機会を作り、全6回の相談支援をおこなった。その結果、家族へのクリスマスのプレゼントを考えるという身近なライフイベントの中で、Aにとって「社会的に望ましい気持ちの伝え方」を知り、また「相手にうれしいと思うことをすることは自分もうれしい」というように、さらなる向社会的行動につながる気持ちの深まりがみられた。

キーワード : 広汎性発達障害, 対人トラブル, 自然な生活文脈, 他者視点取得, 向社会的行動

Keywords : Pervasive Developmental Disorder, Interpersonal Problems, Context in Natural Setting Events, Perspective Taking, Prosocial Behavior

I. 問題

広汎性発達障害のある人は、対人コミュニケーションやソーシャルスキルの習得、衝動性のコントロールに困難を抱えている。そしてそのことから、性に関する問題行動を起こし、性に関する事件の加害者となることがある(生島・岩田, 2009)。特に、特別支援学校ではなく、通常学級を卒業したような、知的能力に遅れない広汎性発達障害のある人は、学校教育段階で彼らの障害特性にあわせたソーシャルスキルの指導あるいは性教育が必ずしも十分ではないため、地域生活を送る上で、対人トラブル、なかでも異性との関係にトラブルを抱えるケースもみられるという指摘もある(中島・水内, 2012)。またこうした背景には、広汎性発達障害者が、他者の感情や認知面において視点取得の困難を抱える(奥田・井上, 2002ほか)という特性も大きく影響していると考えられる。

そこで本研究では、職場から筆者に相談支援の依頼があった、異性との対人トラブルを主訴とする広汎性発達障害のある成人に対して、問題行動そのものをターゲットにして訓練するのではなく、自然な生活文脈の中で他者視点取得の機会を作り支援をおこなった実践事例について報告する。

II. 方法

1. 対象

相談支援の対象であるA氏は、初回来談時28歳の男性、知的障害・広汎性発達障害である。WAIS-IIIによる知的機能の評価はFIQ53, VIQ64, PIQ49であり、言語理解は他の能力に比較して高く、下位検査では特に「知識」と「数唱」が優れていた。A氏は自動車運転免許とホームヘルパー3級の資格を有している。

家族構成は父、母、兄、本人である。生育歴は、小、中、高等学校普通科を卒業の後、専門学校に進学するも中退。その後いくつかの会社勤務を経て、2年前より現在の会社に障害者雇用枠で採用され清掃業務に就く。職場には自宅からバスで通勤している。業務内容は、事業所内1つのビルをA氏を含め4人で1チームとなって清掃する。職場での上司からの評価は、「勤務態度はよいが、仕事の要領が悪い」、「仕事の覚えが悪く、同じところの清掃を何度も繰り返す」というものであった。

職場の人事担当者からのA氏の問題案件の主訴は、特定の女子社員に対するつきまとい行為(バス停で肩にふれるほど接近する、携帯電話を覗き込む、社員食堂で勝手に写真撮影するなど)、職場で突然全裸になる、備品(コップなど)を故意に破損するというものであった。

* 富山大学人間発達科学部

表1 支援プログラム

#	日時	活動	目的
1	X/12/20	自分と他者の思いの違いに気づこう X'masプレゼントを考えよう！	インテーク面接
2	X/12/24	X'masプレゼントを買いにいこう！	相手の立場に立ちプレゼントを選ぶ・渡す
3	X/12/26	してよいことと悪いこと X'masの結果	してよいことと悪いこと、その理由について考 える プレゼントを渡した結果を報告する
4	X+1/1/22	相手の立場に立って考えてみよう！	こころの理論課題、ストレンジストーリーなど
5	X+1/2/18	アセスメント／雑談タイム	WAIS-III
6	X+1/3/20	職場の上司に感謝の手紙を書こう！	感謝の気持ちを伝える

2. プログラム

支援プログラムはT大学の相談室にて、臨床発達心理士である筆頭著者ならびに特別支援教育を専門とするアシスタントである第二著者（以下、支援者とする）によりおこなわれた。A氏に就業時間後に来室してもらい、表1に示すように、約3ヶ月間に計6回の支援プログラムを実施した。

3. 相談支援の視点

A氏はこれまでの学校・職場以外での生活経験が年齢に比して乏しいため、相談支援においては、選択肢を提示し、自己選択・自己決定をする機会を多く増やすこと、軽微な失敗が許される状況の中でできるだけ自分で考えて決断しかつ成功体験を増やすこと、社会的規範や重要なことはメモをとりロールプレイなどとあわせて学習させるように心がけた。

Ⅲ. 結果

1. 第1回 自分と他者の思いの違いに気づこう ／クリスマスプレゼントを考えよう

第1回目のプログラムでは、はじめにA氏の生育歴と現在の生活について確認した。クリスマスが近かったこともあり、アイスブレイクのために、A氏のクリスマスの過ごし方について確認したところ、「クリスマスは家族と過ごす」、「クリスマスプレゼントは誰にも渡したことがない」ということであった。また話の流れから異性の話になり、「彼女がほしい」、「彼女ができれば一緒に写真を撮りたい」と述べるなど、異性に対する強い意識もみられた。一方でA氏は「高校時代、友達はいなかった」と答えた。そこで、支援者はA氏に「友達とはなにか」について質問したところ、逆に「友達や彼女はもうしたら作れますか」と質問してきたので、友達や彼女の作り方などは辞書に書いているものではなく、作り方

が決まっているのではないということもA氏に伝えた。

次に、A氏は、特定の女子社員につきまとい行為をしていることから、A氏に、異性についてどのように思っているのか、いくつか質問をした。まず、「バスに乗っていて気になる女性がいたら、肩が触れるほど接近していいか」という支援者の質問に対しては、「だめ、知らない相手だと相手が怒るから」と答えてはいたものの、これは単に「嫌なことをしたら相手が怒る」という断片的な知識のみで答えている様子がみられた。さらに、「もし、スーパーに買い物に行ったとき、たまたまA氏の気になる人がいたらどう思う」と質問をしたところ、「おれのが好きだから、あの人もスーパーにいたのか、と思う」と答えた。これについてはA氏の思い込みであり、気になる女性がA氏に会うためにスーパーにきたのではないということも伝えた。するとA氏は「人間は人を好きにならなくても、いるだけで自分のことが好きなのかも…って思うこともあるのではないかな。自分は買い物をしていて、そこで出会ったら、もしかして相手も俺のこと好きなのかも、と思う」と話した。これらのことから、主訴案件である特定の女性へのつきまとい行為は、A氏の他者視点に立って相手の気持ちを考えることの困難に起因していることが確認された。

さらに先述のようにA氏は「クリスマスは家族と過ごす、プレゼントは渡したことがない」ということであったため、A氏と一緒に、家族へのクリスマスプレゼントを考えることをこの後の相談の中心事項とした。A氏と話し合いを進める中で、お酒が好きな父にはシャンパンとおつまみのチーズ、母にはハンカチ、たばこが好きな兄には灰皿をプレゼントすることが決まった。決定までのプロセスを表2に示す。クリスマスイブである12月24日に支援者とA氏とでプレゼントを買いに行くこととし、日時と所持金を決め、終了した。

表2 プレゼントを考える取り組み

相手	何をあげたらよろこぶかな?	Aさんとの対話と、きめたもの
父	わからん	お父さんは夜にお酒のむので、お酒がいいかも。 クリスマスなのでシャンパンがおしゃれかも。
母	わからん <u>安いのはどっち?</u>	女性は、ハンカチやお菓子がいいかも。 「値段」じゃなくて「気持ち」だよ。
兄	わからん	お兄さんはたばこを吸うなら灰皿なんかいいかも。

表3 プレゼントをどのように渡すかを考える取り組み

相手	買ったもの	どのようにして渡すかという問いに対して	Aさんに教えた、渡すときのことば
父	シャンパン チーズ	わからん	お父さん、いつもお仕事をしてくれてありがとう
母	ハンカチ	わからん <u>いつも家にいてくれてありがとう</u>	お母さん、いつもお弁当を作ってくれてありがとう
兄	ビール	わからん	お兄さん、いつもお仕事お疲れさま

2. 第2回 クリスマスプレゼントを買いにいこう

前回のプログラムにおいて家族にあげたいと決めたプレゼントを、ショッピングモールにて、支援者とA氏と一緒にプレゼントを購入しに行った。A氏はこれまでショッピングモールで食品や雑貨を購入した経験がなく、それぞれの品物を陳列しているコーナーへA氏を案内する必要があった。最初に衣料雑貨コーナーに連れていき母親向けのハンカチを選ぶ際、黒色のものを選択したため、支援者は「女性は黒よりも赤やピンクのほうが好きだと思うよ。お母さんはどっちが好きかな」と声かけしたところ赤のハンカチを選択した。またレジに行きそのまま支払いをしようとしたため支援者は「これはプレゼントにするんだよね。ラッピングしてもらったほうがいいよ」と声掛けする必要があった。次に食料品コーナーに行き、シャンパンをひとつ選択させた。その際支援者は「シャンパンだけでなくチーズもあるといいかもしれないよ」と声かけしたところ4つで100円のプロセスチーズを手にとったため「クリスマスのプレゼントでお父さんにあげるものだから、自分が好きなものではなくここ（チーズ売り場）からお父さんがもらったらうれしいと思うものを選んでね」と示唆したところ混乱したため、1,000円程度のチーズを勧めたところA氏はそれに決めた。兄へのプレゼントは当初は灰皿であったが、いざコーナーに行くと自分では選べないと不安になったため、兄が常飲しているビールにすることにした。しかし本人は、値段が一番安いものという理由で発泡酒を選ぶようとしたため「安いものを選ぶことも大事だけど、年に一度のクリスマスだし、お兄さんがもらってうれしいものを選んでみてよ」と声かけしたところ、やや高級なビールを選択し、購入した。

購入後は大学相談室に戻り、プレゼントの受け渡しに関するロールプレイをおこなった。それに先立ち、A

氏は何を言って渡したらよいかわからないということであったため、支援者と相談し、「お父さんいつもお仕事をしてくれてありがとう」、「お母さんいつもお弁当を作ってくれてありがとう」、「お兄さんいつもお仕事お疲れ様」など、相手にプレゼントを渡すときに添える言葉も一緒に考えるとともにメモをとらせ、「ありがとう」に代表される感謝の気持ちを伝えることの大切さについて確認した（表3）。その後、支援者を家族にみためて、メモに基づきプレゼントを渡すときのロールプレイをおこなった。特にラッピングされたハンカチにはサンタのシールがついていたのだが、それを渡す相手である母に見えるような向きで渡すということはA氏は知らず、またその意味も当初はわからなかったため、ロールプレイを通していねいに説明した。

3. 第3回 してよいことと悪いことの確認

第3回目のプログラムでは、A氏の問題行動をとりあげ、社会人として、してよいことと悪いことについて、理解させることを目的とした相談支援をおこなった。

まず、以前に会社で裸になったことについて尋ねたところ、裸になったことの実実は認めたものの理由は自分でもわからないと答えた。そもそもなぜ会社で裸になってはいけないのかについてもわかっていなかったため、A氏自身にとって、同僚や友達にとって、会社にとっての3つの立場から考えられるよう、対話により考えさせた（表4）。しかし自身にとってという点で、知識としてのみよくないことであるという理解にとどまっており、他者に迷惑をかけるという視点をもちにくかった。また、つらいときや気持ちが高ぶったときは、上司に相談したらよいということをしていねいに伝えた（表5）。

次に、第2回のプログラムで家族に対して買ったクリスマスプレゼントをどのように渡したのかについて尋ね

表5 行動の是非についての確認の取り組み

してもいいこと・○なこと	してはいけないこと・×なこと
上司に相談する	服を脱ぐ
M先生（筆者）に相談する	好きな女の子の写真を撮る
	好きな女の子に抱きつく

表4 自分の行動を他者の視点から考える取り組み

Aさんにとって	まわりの人にとって	会社にとって
怒られる (A)	いやな気持ち (A)	この会社にはへんな人がいると
仕事を辞めさせられる (T)	気持ち悪い (A)	いう評判になる (A)

(A) =A氏と支援者とのていねいな対話で導出した応答, (T) =支援者の提案

た。すると、父・母ともに「ありがとう」とA氏に言ってくれたとのことだった。支援者はA氏がそのときどんな気持ちか聞いたところ、A氏は「うれしいな、買ってきてよかった」、「お父さん、お母さんにうまれてはじめてものをあげた。うれしかった」と述べた。さらに、「相手が喜んでくれたら自分もうれしい」とも述べ、相手の気持ちに立って考えることの端緒についてことがうかがえた。しかしそれに引き続いて「知らない人でも、ものをあげたら喜んでくれるか」とA氏が尋ねたため、「知らない人にもものをあげたら、相手はびっくりしたり、気持ち悪いと思ったりするかもしれないよ。やめておくこと」と支援者は伝えた。

4. 第4回 あいての立場に立って考えてみよう 「こころの理論」課題

4回目のプログラムでは、A氏が他者の視点に立って考える能力の状態を客観的に把握するため、「こころの理論」の課題をおこなった。第一次の誤信念課題である「サリーアン課題」は、①サリーとアンが部屋で一緒に遊んでいる。②サリーはボールをかごの中に入れて部屋を出て行く。③サリーがいない間にアンがボールを別の箱の中に移す。④サリーが部屋に戻ってくる。という4つの場面を被験者に提示し、「サリーはボールで遊ぼうと思った。どこを探すか？」と被験者に質問する。この課題の正解は「かごの中」となる。これまでの発達心理学研究において、この課題は定型発達児のおおよそ4歳で通過するのに対して、生活年齢が同程度の自閉症の診断のある子どもの8割がこの課題を失敗することが明らかになっている。この課題においてA氏は「ボールは、箱の中にある。でもアンちゃんの箱を勝手に開けたら怒られる」と誤答した。支援者はていねいな説明を試みたが正しく理解させることはできなかった。

5. 第5回 アセスメント／雑談

5回目のプログラムでは、A氏が年度末をもって他市の企業に転職することになったため、申し送り事項を

作成する目的で、A氏に対して知能検査であるWAIS-IIIを実施した。毎回のプログラムのあとでいつもA氏から社会常識に関する質問を受けていたので、検査のあと少し長めの雑談時間をとったところ、A氏が「明日は母親の誕生日だ」という話になったので、「明日の朝、お母さんに会ったらなんて言ってあげますか」と質問した。するとA氏は「誕生日祝ってあげようか」という視点位置のずれた回答をしたため、「誕生日おめでとう」や「いつもお弁当をつくってくれてありがとう」などの感謝の気持ちを伝えたら、お母さんはうれしいよね」ということをA氏と一緒に確認しメモさせた。

6. 第6回 上司に感謝の手紙を書こう

プログラムの最終回である6回目では、これまでお世話になった現在の職場の上司に対して感謝の手紙を書くことを支援者から提案した。まず、手紙に書く内容をA氏と一緒に考えてメモをとった。A氏は「上司には、掃除の仕方やあいさつの仕方、身だしなみを教えてもらって嬉しかった」、「次の職場でもがんばりたい」と話していたため、手紙には、「上司に教えてもらったこと」と「上司に対する感謝の気持ちと次の仕事への抱負」の2つについて書くようにアドバイスしたところ、「○○さんには△△をおしえてもらいました」というような事実文を中心に、適宜支援者が感謝のことばの選択肢を示し入れることを提案しながら、便箋8枚の手紙を書いた。書き終わった後、支援者を上司にみたてて、渡し方のロールプレイをおこなった。またその際、「2年間ありがとうございました。次の職場でもがんばります。」という、渡すときの言葉も一緒に考えてメモさせた。なお後日、職場の上司から支援者のほうに、感謝の言葉とともに手紙を渡されたとの報告があった。

IV. 考察

この実践では、女性に近づきすぎる、携帯をのぞきこむといった問題行動を示すA氏に対して、事案の是非

から処罰したり指導したりするだけでなく、A氏の障害特性に起因する他者の視点に立ち、他者の心情を察することの難しさ、ならびに他者との情動交流の経験の乏しさを勘案し、クリスマスというライフイベントに着目し、自然な生活文脈の中で他者視点取得の機会を利用した支援をおこなった。どのようなクリスマスプレゼントを選んだら家族が喜んでくれるか、という事象についてていねいに寄り添い、相手を思いやる行動をする機会を設けた結果、家族からもA氏に対する「ありがとう」ということばを引き出すことができた。そしてA氏は「うれしいな、買ってきてよかった」、「お父さん、お母さんにうまれてはじめてものをあげた。うれしかった」、「相手がよるこんでくれたら自分もうれしい」ということばにみられるような、さらなる向社会的行動につながる気持ちの深まりがみられた。

このように、A氏のような、ものごとの善悪については十分ではないにせよある程度「知識」として理解しているが、表2・表3のやりとりでも「わからん」という応対が多数みられるように、たとえば勝手に人の写真をとるのはNGな理由そのものについてはわからず、また類推することも困難な事例には、問題行動そのものに対して直接的に介入するだけではなく、いまさらながらに、人に何かしてもらおうことのできないこと、人になにかしてあげることのうれしさについて、体験的に学ぶことも必要と考える。A氏でいえば、クリスマスに次いで母親の誕生日もあったが、このような身近なライフイベントの中で、他者視点に立ったり思いやったりする経験を積むことに加えて、支援者が適宜、単に価値の注入ではなく選択肢を提示し、またその帰結も解説することを通して支援をしてきた結果、「社会的に望ましい気持ちの伝え方」を学ぶこともできた。実はこのようなライフイベントは、誕生日、父の日・母の日、固有の記念日、季節の行事、年賀状・暑中見舞いなど、機会は少なくないのである。広汎性発達障害者に対しては、なおのこと、幼少期から家庭あるいは学校においてこのような行事や季節を通して、まずは身近な他者との「ていねいな」情動交流の機会を意図的に創出していくことが重要ではな

いかと考える。

課題としては、この事例では、A氏が家族にプレゼントをあげたり、仕事の上司に手紙を書いたりといった、相手を思いやり何かを「してあげる経験」のみであったが、それ以前に、あるいはそれ以上に、A氏自身が誰かに「してもらった経験」を通してうれしいと感じることが重要であると考えられる。そのためには、家族や友人、職場などのA氏を取り巻く周りの協力の中で支援をおこなう必要があるだろう。

附記

支援者と職場、職場のカウンセラーとの話し合いに基づき、A氏の事業所内での配置換えをおこない、被害女性とは物理的に遭遇しえない措置をとった。また、被害女性に対しては、職場のカウンセラーが対応し、心理的ダメージの回復が良好であることを確認している。

研究報告として本事例をとりあげることには本人ならびに関係者に同意を得ている。

なお、本研究は、平成27年度学部長裁量経費によりおこなわれたものの一部である。

引用文献

- ・生島博之，岩田郁子（2009）：非行と特別支援教育—最近の少年犯罪に関する教育臨床的研究—。愛知教育大学教育実践総合センター紀要，12，37-51.
- ・中島育美，水内豊和（2012）：発達障害児等の性教育に関する養護教諭の意識。小児保健研究，71（5），763-772.
- ・奥田健次，井上雅彦（2002）：自閉症児における自己／他者知識に関する状況弁別の獲得と般化。発達心理学研究，13（1），51-62.

（2015年8月31日受付）

（2015年10月13日受理）